

南洲手抄言志録

南洲手抄言志録

佐藤一齋・秋月種樹（古香）

山田濟齋識

一 勿下認二游惰一以爲中寬裕上。勿下認二嚴刻一以爲中直諒上。勿下認二私欲一以爲中志願上。

〔譯〕游惰を認めて以て寬裕と爲すこと勿れ。嚴刻を認めて以て直諒と爲すこと勿れ。私欲を認めて以て志願と爲すこと勿れ。

二 毀譽得喪、眞是人生之雲霧、使二人昏迷一。一二掃此雲霧一、則天青日白。

〔譯〕毀譽得喪は、眞に是れ人生の雲霧、人をして昏迷せしむ。此の雲霧を一掃せば、則ち天青く日白し。

〔評〕徳川慶喜公は勤王の臣たり。幕吏の要する所となりて朝敵となる。猶南洲勤王の臣として終りを克くせざるごとし。公は罪を宥し位に敘せらる、南洲は永く反賊の名を蒙る、悲しいかな。（原漢文、下同）

三 唐虞之治、只是情一字。極而言レ之、萬物一體、不レ外ニ於情之推一。
〔譯〕唐虞の治は只是れ情の一字なり。極めて之を言へば、萬物一體も情の推すゐに外ならず。

〔評〕南洲、官軍を帥めぐみて京師を發す。婢ひあり別れを惜みて伏水ふしみに至る。兵士環めぐつて之を視みる。南洲輿中より之を招まき、其背を拊うつて曰ふ、好在たつしやなれと、金を懷中くわいちゆうより出して之に與へ、旁かたはら人なき若し。兵士太はなはだ其の情を匿かくさざるに服す。幕府砲臺はうだいを神奈川に築きづき、外人の來り觀るを許さず、木戸公役徒えきとに雜り、自ら畚ふこを荷になうて之を觀る。茶店の老嫗らうをうあり、公の常人に非ざるを知り、善く之を遇す。公志を得るに及んで、厚く之に報ゆ。皆情の推すゐなり。

四 凡作レ事、須レ要レ有二事レ天之心一。不レ要レ有二示レ人之念一。
〔譯〕凡そ事を作なすには、須すべからく天に事つかふるの心あるを要えうすべし。人に示すの念ねんあるを要せず。

五 憤一字、是進學機關。舜何人也、予何人也、方是憤。
〔譯〕憤の一字、是れ進學の機關なり。舜何人ぞや、予何人ぞや、方に是れ憤。

六 著レ眼高、則見レ理不レ岐。

〔譯〕眼を著くること高ければ、則ち理を見ること岐せず。

〔評〕三條公は西三條、東久世諸公と長門に走る、之を七卿脱走と謂ふ。幕府之を宰府に竄す。既にして七卿が勤王の士を募り國家を亂さんと欲するを憂へ、浪華に幽するの議あり。南洲等力めて之を拒ぎ、事終に熄む。南洲人に語つて曰ふ、七卿中他日關白に任ぜらるゝ者は、必三條公ならんと、果して然りき。

七 性同而質異。質異、教之所二由設一也。性同、教之所二由立一也。

〔譯〕性は同じうして而て質は異なる。質異なるは教の由つて設けらるゝ所なり。性同じきは教の由つて立つ所なり。

八 喪レ己斯喪レ人。喪レ人斯喪レ物。

〔譯〕己を喪へば斯に人を喪ふ。人を喪へば斯に物を喪ふ。

九 士貴ニ獨立自信一矣。依レ熱附レ炎之念、不レ可レ起。

〔譯〕士は獨立自信を貴ぶ。熱に依り炎に附くの念、起す可らず。

〔評〕慶應三年九月、山内容堂公は寺村左膳、後藤象次郎を以て使とな

し、書を幕府に呈す。曰ふ、中古以還、政刑武門に出づ。洋人來航する

に及んで、物議紛々、東攻西擊して、内訌嘗て戢る時なく、終に外國の

輕侮を招くに至る。此れ政令二途に出で、天下耳目の屬する所を異にす

るが故なり。今や時勢一變して舊規を墨守す可らず、宜しく政權を王室

に還し、以て萬國竝立の基礎を建つべし。其れ則ち當今の急務にして、

而て容堂の至願しぐわんなり。幕下ぼくの賢けんなる、必之を察さつするあらんと。他日幕府の政權を還かへせる、其事實に公の呈書ていしよに本もとづけり。當時幕府ぼくふ既に衰おとろへたりと雖、威權ゐけん未だ地に墜おちず。公抗論かうろんして忌いまず、獨立の見ありと謂ふべし。

一〇 有二本然之眞己一、有二軀殼之假己一。須レ要二自認得一。

〔譯〕 本然ほんぜんの眞己しんこ有り、軀殼くかくの假己かこ有り。須らく自ら認みとめ得んことを要すべし。

〔評〕 南洲胃を病む。英醫偉利いりす斯之を診しんして、勞動を勸すすむ。南洲是より山野に游獵いうれふせり。人或は病なくして犬を牽ひき兔を逐おひ、自ら南洲を學ぶと謂ふ、疎そなり。

一一 雲煙聚二於不一レ得レ已。風雨洩二於不一レ得レ已。雷霆震二於不一レ得レ已。斯可三以觀二至誠之作用一。

〔譯〕 雲煙は已むことを得ざるに聚る。風雨は已むことを得ざるに洩る。
雷霆は已むことを得ざるに震ふ。斯に以て至誠の作用を觀る可し。

一二 動ニ於不レ得レ已之勢一、則動而不レ括。履ニ於不レ可レ枉之途一、則履而不レ危。

〔譯〕 已むことを得ざるの勢に動けば、則ち動いて括せず。枉ぐ可らざるの途を履めば、則ち履んで危からず。

〔評〕 官軍江戸を伐つ、關西諸侯兵を出して之に従ふ。是より先き尾藩宗家を援けんと欲する者ありて、私かに聲息を江戸に通ず。尾公之を患へ、田中不二麿、丹羽淳太郎等と議して、大義親を滅すの令を下す、實に已むことを得ざるの擧に出づ。一藩の方向以て定めり。

一三 聖人如ニ強健無レ病人一。賢人如ニ攝生慎レ病人一。常人如ニ虚羸多レ病人一。

〔譯〕 聖人は強健病無き人の如し。賢人は攝生病を慎む人の如し。常人は虚羸病多き人の如し。

一四 急迫敗レ事。寧耐成レ事。

〔譯〕 急迫は事を敗る。寧耐は事を成す。

〔評〕 大坂城陥る。徳川慶喜公火船に乗りて江戸に歸り、諸侯を召して罪を俟つの状を告ぐ。余時に江戸に在り、特に別廳に召し告げて曰ふ。

事此に至る、言ふ可きなし。汝將に京に入らんとすと聞く、請ふ吾が爲

めに恭順の意を致せと。余江戸を發して桑名に抵り、柳原前光公軍を

督して至るに遇ふ。余爲めに之を告ぐ。京師に至るに及んで、松平春嶽

公を見て又之を告ぐ。慶喜公江戸城に在り、衆皆之に逼り、死を以て城

を守らんことを請ふ。公聽かず、水戸に赴く、近臣二三十名従ふ。衆奉

じて以て主と爲すべきものなく、或は散じて四方に之き、或は上野に據

る。若し公をして耐忍の力無く、共に怒つて事を擧げしめば、則ち府下

悉く焦土と爲らん。假令都を遷すも、其の盛大を極むること今日の如きは實に難からん。然らば則ち公常人の忍ぶ能はざる所を忍ぶ、其功亦多し。舊藩士日高誠實時に句あり云ふ。

「功烈尤も多かりしは前内府。至尊直に鶴城の中に在り」と。

一五 聖人安レ死。賢人分レ死。常人恐レ死。

〔譯〕 聖人は死を安んず。賢人は死を分とす。常人は死を恐る。

一六 賢者臨レ歿、見ニ理當一レ然、以爲レ分、恥レ畏レ死、而希レ安レ死、故神氣不レ亂。又有ニ遺訓一、足ニ以聳一レ聽。而其不レ及ニ聖人一亦在ニ於此一。聖人平生言動無ニ一非一レ訓。而臨レ歿、未三必爲ニ遺訓一。視ニ死生一眞如ニ晝夜一、無レ所レ著レ念。

〔譯〕 賢者は歿するに臨み、理の當に然るべきを見て、以て分と爲し、死を畏るゝを恥ぢて、死を安んずるを希ふ、故に神氣亂れず。又遺訓

あり、以て聽ちやうを聳そびかすに足る。而かも其の聖人に及ばざるも亦此に在り。聖人は平生の言動げんどう一として訓に非ざるは無し。而て歿するに臨のぞみて、未だ必しも遺訓を爲つくらず。死生しせいを視みること眞に晝夜ちうやの如し、念ねんを著つくる所無し。

〔評〕十年の役えき、私學校の徒と、彈藥製造所を掠かすむ。南洲時に兎を大隈山おほすみ中に逐おふ。之を聞いて猝にはかに色いろを變かへて曰ふ、誤しまつたと。爾後じご肥後日向に轉戰して、神色夷然いぜんたり。

一七 堯舜文王、其所レ遺典謨訓誥、皆可三以爲二萬世法一。何遺命如レ之。至二於成王顧命、曾子善言一、賢人分上自當レ如レ此已。因疑孔子泰山之歌、後人假託爲レ之。檀弓叵レ信、多二此類一。欲レ尊二聖人一、而却爲二之累一。

〔譯〕堯舜文王は、其の遺のこす所の典謨訓誥、皆以て萬世の法と爲す可し。何の遺命いめいか之に如かん。成王の顧命こめい、曾子の善言に至つては、賢人の分ぶん

上おのづか自まさら當まさに此この如ごとくなるべきのみ。因うたがつて疑うたがふ、孔子たいざん泰山の歌、後人こうた假託かたく之こを爲つくれるならん。檀弓だんぐうの信しんじじ叵がたきこと此この類るい多おほし。聖人せいじんを尊たつとばんと欲ほして、却かへつて之こが累るゐを爲つくせり。

一八 一部歴史、皆傳二形迹一、而情實或不レ傳。讀レ史者、須レ要下就二形迹一以討中出情實上。

〔譯〕 一ぶ部のれきし歴史、皆けいせき形迹を傳つたへて、情實じやうじつ或は傳つたらず。史を讀よむ者は、須たつとらく形迹に就ついて以て情實を討たづね出だすことを要たつとすべし。

一九 博聞強記、聰明横也。精義入レ神、聰明豎也。
〔譯〕 博聞強記はくぶんきやうきは、聰明そうめいの横よこなり。精義せいぎ神に入るは、聰明そうめいの豎たてなり。

二〇 生物皆畏レ死。人其靈也、當下從二畏レ死之中一、揀中出不レ畏レ死之理上。吾思、我身天物也。死生之權在レ天、當レ順二受之一。我之

生也、自然而生、生時未二嘗知一レ喜矣。則我之死也、應三亦自然而死、死時未二嘗知一レ悲也。天生レ之而天死レ之、一聽二于天一而已、吾何畏焉。吾性即天也。軀殼則藏レ天之室也。精氣之爲レ物也、天寓二於此室一。遊魂之爲レ變也、天離二於此室一。死之後即生之前、生之前即死之後。而吾性之所二以爲一レ性者、恒在二於死生之外一、吾何畏焉。夫晝夜一理、幽明一理。原レ始反レ終、知二死生之理一、何其易簡而明白也。吾人當下以二此理一自省上焉。

〔譯〕生物は皆死を畏る。人は其靈なり、當に死を畏るゝの中より死を畏れざるの理を揀出すべし。吾れ思ふ、我が身は天物なり。死生の權は天に在り、當に之を順受すべし。我れの生るゝや自然にして生る、生るゝ時未だ嘗て喜ぶことを知らず。則ち我の死するや應に亦自然にして死し、死する時未だ嘗て悲むことを知らざるべし。天之を生まて、天之を死す、一に天に聽さんのみ、吾れ何ぞ畏れん。吾が性は即ち天なり、軀殼は則ち天を藏むるの室なり。精氣の物と爲るや、天此の室に寓す。

遊魂いうこんの變へんを爲すや、天此の室を離はなる。死の後は即ち生の前なり、生の前は即ち死の後なり。而て吾が性の性たる所以は、恒つねに死生の外に在り、吾れ何ぞ畏れん。夫れ晝夜は一理りなり、幽明いうめいは一理なり。始めを原たうねて終をはりに反かへらば、死生の理を知る、何ぞ其の易簡いかんにして明白なるや。吾人は當に此の理を以て自省じせうすべし。

二一 畏レ死者生後之情也、有二軀殻一而後有二是情一。不レ畏レ死者生前之性也、離二軀殻一而始見二是性一。人須レ自二得不レ畏レ死之理於畏レ死之中一、庶二乎復一レ性焉。

〔譯〕 死を畏るゝは生後の情なり、軀殻くかく有つて後に是の情あり。死を畏れざるは生前の性なり、軀殻くかくを離はなれて始て是の性を見る。人は須すべからく死を畏れざるの理を死を畏るゝの中に自得じとくすべし、性に復かへるに庶ちかし。

〔評〕 幕府勤王の士を逮とらふ。南洲及び伊地知正治、海江田武治等尤も其の指目しもくする所となる。僧月照嘗て近衛公の密命みつめいを啣ふくみて水戸に至る、幕

吏之もとを索もとむること急なり。南洲其の免れざることを知り相共に鹿兒島に奔はしる。一日南洲、月照の宅を訪とふ。此の夜月色清輝せいきなり。預あらかじめ酒饌しゆせんを具そなへ、舟を薩海さかいに泛うかぶ、南洲及び平野次郎一僕と従ふ。月照船頭に立ち、和歌を朗吟らうぎんして南洲に示す、南洲首肯しゆかうする所あるものゝ如し、遂に相擁ようして海に投とうず。次郎等水聲起るを聞いて、倉皇そうくわうとして之を救ふ。月照既に死して、南洲は蘇よみがへることを得たり。南洲は終身しゆうしん月照と死せざりしを憾うらちみたりと云ふ。

二二 誘掖いうえき而導みちびレ之、教之常也。警戒けいかい而喻さとレ之、教之時也。躬行み以率ひレ之、教之本也。不おレ言お而化あレ之、教之神也。抑而揚おさレ之、激而進げきレ之、教之權而變也。教亦多おレ術矣。

〔譯〕誘掖いうえきして之を導みちびくは、教の常なり。警戒けいかいして之を喻さとすは、教の時なり。躬みに行うて之を率ひきゐるは、教の本なり。言はずして之を化あするは、教の神しんなり。抑おさへて之を揚あげ、激げきして之を進すすましむるは、教の權けんに

して而て變へんなり。教も亦術じゆつ多し。

二三 閑想客感、由二志之不一レ立。一志既立、百邪退聽。譬二之清泉湧出、旁水不一レ得二渾入一。

〔譯〕 閑想かんさう客感きやくかんは、志の立たざるに由る。一志既に立てば、百邪退き聽きく。之を清泉湧出せいせんようしゆつせば、旁水渾入ぼうすゐこんにふすることを得ざるに譬たとふべし。

〔評〕 政府郡縣ぐんけんの治ちを復ふくせんと欲す、木戸公と南洲と尤も之を主張す。或ひと南洲を見て之を説く、南洲曰く諾だくすと。其人又之を説く、南洲曰く、吉之助の一諾、死以て之を守ると、他語たごを交まじへず。

二四 心爲レ靈。其條理動二於情識一、謂二之欲一。欲有二公私一、情識之通二於條理一爲レ公。條理之滯二於情識一爲レ私。自辨二其通滯一者、即便心之靈。

〔譯〕 心を靈れいと爲す。其の條理でうりの情識じやうしきに動うごく、之を欲よくと謂ふ。欲に公私こうし

有り、情識の條理に通ずるを公と爲す。條理の情識に滯るを私と爲す。自ら其の通と滯とを辨ずるは、即ち心の靈なり。

二五 人一生所レ遭、有二險阻一、有二坦夷一、有二安流一、有二驚瀾一。是氣數自然、竟不レ能レ免、即易理也。人宜二居而安、玩而樂一焉。若趨二避之一、非二達者之見一。

〔譯〕人一生遭ふ所、險阻有り、坦夷有り、安流有り、驚瀾有り。是れ氣數の自然にして、竟に免るゝ能はず、即ち易理なり。人宜しく居つて安んじ、玩んで楽しむべし。若し之を趨避せば、達者の見に非ず。

〔評〕或ひと岩倉公幕を佐くと讒す。公薙髮して岩倉邸に蟄居す。大橋慎藏、香川敬三、玉松操、北島秀朝等、公の志を知り、深く結納す。南洲及び大久保公、木戸公、後藤象次郎、坂本龍馬等公を洛東より迎へて、朝政に任せしむ。公既に職に在り、屢刺客の狙撃する所となり、危難累りに至る、而かも毫も趨避せず。

二六 心之官則思。思字只是工夫字。思則愈精明、愈篤實。自二其篤實一謂二之行一、自二其精明一謂二之知一。知行歸二於一思字一。

〔譯〕心の官かんは則ち思ふ。思の字只是れ工夫くふうの字なり。思へば則ち愈せいめい精明なり、愈篤實とくじつなり。其の篤實より之を行と謂ひ、其の精明より之を知と謂ふ。知と行とは一の思の字に歸きす。

二七 處レ晦者能見レ顯。據レ顯者不レ見レ晦。

〔譯〕晦くわいに處をる者は能く顯けんを見る。顯けんに據よる者は晦を見ず。

二八 取二信於人一難也。人不レ信二於口一、而信二於躬一。不レ信二於躬一、而信二於心一。是以難。

〔譯〕信しんを人に取りは難し。人は口を信ぜずして躬みを信ず。躬を信ぜずして心を信ず。是を以て難し。

〔評〕南洲守庭吏と爲る。島津齊彬公其の眼光炯々として人を射るを見て凡人に非ずと以爲ひ、拔擢して之を用ふ。公嘗て書を作り、南洲に命じて之を水戸の烈公に致さしめ、初めより封緘を加へず。烈公の答書も亦然り。

二九 臨時之信、累ニ功於平日一。平日之信、收ニ効於臨時一。

〔譯〕臨時の信は、功を平日に累ぬればなり。平日の信は、効を臨時に收むべし。

〔評〕南洲官軍の先鋒となり、品川に抵る、勝安房、大久保一翁、山岡鐵太郎之を見て、慶喜罪を俟つの状を具陳し、討伐を弛べんことを請ふ。安房素より南洲を知れり、之を説くこと甚だ力む。乃ち令を諸軍に傳へて、攻撃を止む。

三〇 信孚ニ於上下一、天下無ニ甚難レ處事一。

〔譯〕 信上下に孚す、天下甚だ處し難き事無し。

三一 意之誠否、須下於二夢寐中事一驗上レ之。

〔譯〕 意の誠否は、須らく夢寐中の事に於て之を驗すべし。

〔評〕 南洲弱冠の時、藤田東湖に謁す、東湖は重瞳子、軀幹魁傑にして、

黄麻の外套を被、朱室の長劔を佩して南洲を邀ふ。南洲一見して瞿然た

り。乃ち室内に入る、一大白を屬して酒を侑めらる。南洲は素と飲を解

せず、強ひて之を盡す、忽ち酪酊して嘔吐席を汚す。東湖は南洲の朴率

にして飾るところなきを見て酷だ之を愛す。嘗て曰ふ、他日我が志を繼

ぐ者は獨此の少年子のみと。南洲も亦曰ふ、天下眞に畏る可き者なし、

唯畏る可き者は東湖一人のみと。二子の言、夢寐相感ずる者か。

三二 不レ起ニ妄念一是敬。妄念不レ起是誠。

〔譯〕 妄念を起さざるは是れ敬なり。妄念起らざるは是れ誠なり。

三三 因二民義一以激レ之、因二民欲一以趨レ之、則民忘二其生一而致二其死一。是可二以一戰一。

〔譯〕 民の義ぎに因つて以て之を激げきし、民の欲よくに因つて以て之を趨はしらさば、則ち民其の生を忘わすれて其の死を致いたさん。是れ以て一戰せんす可し。

〔評〕 兵數は孰いづれか衆おほき、器械きかいは孰いづれか精せいなる、糧食りやうじよくは孰いづれか積つめる、この數者を以て之を較くらべば、薩長さつちやうの兵は固より幕府に及ばざるなり。然り而して伏見ふしみの一戰、東兵披靡ひびするものは何ぞや。南洲及び木戸公等のさく※、民の欲よくに因つて之を趨はしらしたればなり。是を以て破竹はちくの勢いきほひありたり。

三四 漸必成レ事、惠必懷レ人。如二歴代姦雄一、有下竊二其祕一者上、一時亦能遂レ志。可レ畏之至。

〔譯〕 漸ぜんは必ず事を成なし、惠けいは必ず人を懷なづく。歴代れきだい姦雄いかんゆうの如き、其祕ひ

を竊ぬすむ者有り、一時亦能く志を遂とぐ。畏る可きの至りなり。

三五 匿情似二慎密一。柔媚似二恭順一。剛復似二自信一。故君子惡二似而非者一。

〔譯〕匿情とくじやうは慎密しんみつに似るに。柔媚じうびは恭順きやうじゆんに似る。剛復かうふくは自信じしんに似る。故に君子は似て非ひなる者を惡にくむ。

三六 事レ君不レ忠非レ孝也、戰陳無レ勇非レ孝也。曾子孝子、其言如レ此。彼謂三忠孝不二兩全一者、世俗之見也。

〔譯〕君に事つかへて忠ならずるは孝に非ざるなり、戰陳せんじんに勇無きは孝に非ざるなりと。曾子そうしは孝子なり、其の言かく此の如し。彼の忠孝りやうぜん兩全せずと謂ふは、世俗せぞくの見なり。

〔評〕十年の難なん、賊の精銳せいえい熊本城下に聚あつまる。而て援軍えんぐん未だ達せず。谷中將死を以て之を守り、少しも動かず。賊勢ぞくせい遂に屈し、其兵を東する能は

ず。昔者むかし加藤嘉明よしあき言へるあり。曰ふ、將しやうを斬り旗はたを擧とるは、氣盛なる者之を能くす、而かも眞勇しんゆうに非ざるなり。孤城こじやうを援えんなきに守り、孱主せんを衆そむ睽たもくに保つ、律義者りちぎものに非ざれば能はず、故に眞勇は必ず律義者りちぎものに出づと。尾藤孝肇びとうかうてう曰ふ、律義りちぎとは蓋けだし直ちよくにして信あるを謂ふと。余謂ふ、孤城を援なきに守るは、谷中將えんの如くば可なりと。嗚呼中將は忠且つ勇なり、而して孝其うちの中に在り。

三七 不レ可レ誣者人情、不レ可レ欺者天理、人皆知レ之。蓋知而未レ知。

〔譯〕 誣しふ可らざる者は人情なり、欺あそむく可らざる者は天理なり、人皆之を知る。蓋けだし知つて而して未だ知らず。

〔評〕 榎本武揚等五稜郭えのもとぶやうの兵已りようかくに敗る。海律全書二卷を以て我が海軍に贈おくつて云ふ、是れ嘗て荷蘭おらんだに學んで獲えたる所なり、身と俱ほろに滅ぶることを惜しむと。武揚の誣おふ可らざるの情天聽てんぢやうに達たつし、其の死を宥ちよゆうし寵用せ

らる、天理なり。

三八 知是行之主宰、乾道也。行是知之流行、坤道也。合以成二體軀一。則知行、是二而一、一而二。

〔譯〕 知は是れ行の主宰なり、乾道なり。行は是れ知の流行なり、坤道なり。合して以て體軀を成す。則ち知行は是れ二にして一、一にして二なり。

三九 學貴ニ自得一。人徒以レ目讀ニ有字之書一、故局ニ於字一、不レ得ニ通透一。當三以レ心讀ニ無字之書一、乃洞而有ニ自得一。

〔譯〕 學は自得を貴ぶ。人徒に目を以て有字の書を読む、故に字に局し、通透することを得ず。當に心を以て無字の書を読むべし、乃ち洞して自得するところ有らん。

四〇 孟子以二讀書一爲二尚友一。故讀二經籍一、即是聽二嚴師父兄之訓一也。讀二史子一、亦即與二明君賢相英雄豪傑一相周旋也。其可レ不下清二明其心一以對中越之上乎。

〔譯〕 孟子讀書を以て尚友と爲す。故に經籍を讀む、即ち是れ嚴師父兄の訓を聽くなり。史子を讀む、亦即ち明君賢相英雄豪傑と相周旋するなり。其れ其の心を清明にして以て之に對越せざる可けんや。

四一 爲レ學緊要、在二心一字一。把レ心以治レ心、謂二之聖學一。爲レ政著眼、在二情一字一。循レ情以治レ情、謂二之王道一。王道聖學非レ二。

〔譯〕 學を爲すの緊要は心の一字に在り。心を把つて以て心を治む、之を聖學と謂ふ。政を爲すの着眼は情の一字に在り。情に循うて以て情を治む、之を王道と謂ふ。王道と聖學と二に非ず。

〔評〕 兵を治して對抗し、互に勝敗あり。兵士或は負傷者の状を爲す、

醫故に之を診察す。兵士初め負傷者とならんことを惡む。一日、聖上親臨して負傷者を撫し、恩言を賜ふ、此より兵士負傷者とならんことを願ふ。是に由つて之を觀れば、兵を馭するも亦情に外ならざるなり。

四二 發レ憤忘レ食、志氣如レ是。樂以忘レ憂、心體如レ是。不レ知二老之將一レ至、知レ命樂レ天如レ是。聖人與レ人不レ同、又與レ人不レ異。

〔譯〕 憤を發して食を忘る、志氣是の如し。樂んで以て憂を忘る、心體是の如し。老の將に至らんとするを知らず、命を知り天を樂しむもの是の如し。聖人は人と同じからず、又人と異ならず。

四三 講ニ說聖賢一、而不レ能レ躬レ之、謂ニ之口頭聖賢一、吾聞レ之一惕然。論ニ辯道學一、而不レ能レ體レ之、謂ニ之紙上道學一、吾聞レ之再惕然。

〔譯〕 聖賢を講説かうせつして之を躬みにする能はず、之を口頭こうとう聖賢と謂ふ、吾れ之を聞いて一たび惕然てきぜんたり。道學を論辯ろんべんして之を體たいする能はず、之を紙上道學と謂ふ、吾れ之を聞いて再び惕然てきぜんたり。

四四 學、稽二之古訓一、問、質二之師友一、人皆知レ之。學必學二之躬一、問必問二諸心一、其有二幾人一耶。

〔譯〕 學がく之を古訓こくんに稽かんがへ、問もん之を師友しゆうに質たゞすは、人皆之を知る。學必ず之を躬みに學び、問必ず諸を心に問ふは、其れ幾人有らんか。

四五 以レ天而得者固。以レ人而得者脆。

〔譯〕 天を以て得たるものは固かたし。人を以て得たるものは脆もろし。

四六 君子自慊、小人自欺。君子自彊、小人自棄。上達下達、落二在一自字一。

〔譯〕君子は自ら慊くし、小人は自ら欺く。君子は自ら疆め、小人は自ら棄つ。上達と下達とは、一の自の字に落在す。

四七 人皆知レ問ニ身之安否一、而不レ知レ問ニ心之安否一。宜下自問中能不レ欺ニ闇室一否、能不レ愧ニ衾影一否、能得ニ安穩快樂一否上。時時如レ是、心便不レ放。

〔譯〕人は皆身の安否を問ふことを知つて、而かも心の安否を問ふことを知らず。宜しく自ら能く闇室を欺かざるや否や、能く衾影に愧ぢざるや否や、能く安穩快樂を得るや否やと問ふべし。時時は是の如くば心便ち放たず。

〔評〕某士南洲に面して仕官を求む。南洲曰ふ、汝俸給幾許を求むるやと。某曰ふ、三十圓ばかりと。南洲乃ち三十圓を與へて曰ふ、汝に一月の俸金を與へん、汝は宜しく汝の心に向うて我が才力如何を問ふべしと。其人復た來らず。

四八 無レ爲而有レ爲之謂レ誠。有レ爲而無レ爲之謂レ敬。

〔譯〕 爲す無くして爲す有る之を誠まことと謂ふ。爲す有つて爲す無し之を敬けいと謂ふ。

四九 寬懷不レ忤二俗情一、和也。立脚不レ墜二俗情一、介也。

〔譯〕 寬懷俗情に忤さわはざるは、和わなり。立脚俗情に墜おちざるは、介かいなり。

五〇 惻隱之心偏、民或有二溺レ愛殞レ身者一。羞惡之心偏、民或有下

自二經溝澆一者上。辭讓之心偏、民或有二奔亡風狂者一。是非之心偏、民或有二兄弟鬩レ牆父子相訟者一。凡情之偏、雖二四端一遂陷二不善一。

故學以致二中和一、歸三於無二過不及一、謂二之復性之學一。

〔譯〕 惻隱そくいんの心偏へんすれば、民或は愛あいに溺おほれ身を殞おとす者有り。羞惡しうをの心偏すれば、民或は溝澆かうとくに自經じけいする者有り。辭讓じじやうの心偏すれば、民或は奔亡ほんばう

ふうきやう

風狂する者有り。是非の心偏すれば、民或は兄弟牆に鬩ぎ父子相訟ふ者有り。凡そ情の偏するや、四端と雖遂に不善に陥る。故に學んで以て中和を致し、過不及無きに歸す、之を復性の學と謂ふ。

〔評〕江藤新平、前原一誠等の如きは、皆維新の功臣として、勤王二なく、官は參議に至り、位は人臣の榮を極む。然り而して前後皆亂を爲し誅に伏す、惜しいかな。豈四端の偏ありしものか。

五一 此學吾人一生負擔、當ニ斃而後已一。道固無レ窮、堯舜之上善無レ盡。孔子自レ志レ學、至ニ七十一、毎二十年一、自覺ニ其有レ所レ進、孜孜自彊、不レ知ニ老之將一レ至。假使ニ其踰レ耄至一レ期、則其神明不レ測、想當レ爲ニ何如一哉。凡學ニ孔子一者、宜下以ニ孔子之志一爲上レ志。

〔譯〕此の學は吾人一生の負擔、當に斃れて後に已むべし。道固より窮り無し。堯舜の上、善盡くること無し。孔子學に志してより七十に至る

まで、十年毎に自ら其の進む所有るを覺り、孜孜として自ら疆めて、老の將に至らんとするを知らず。假し其をして耄を踰え期に至らしめば、則ち其の神明測られざること、想ふに當に何如たるべきぞや。凡そ孔子を學ぶ者は、宜しく孔子の志を以て志と爲すべし。

五二 自疆不レ息、天道也、君子所レ以也。如下虞舜孳孳爲レ善、大禹思二日孜孜一、成湯苟日新、文王不二遑暇一、周公坐以待レ旦、孔子發レ憤忘上レ食、皆是也。彼徒事二靜養瞑坐一而已、則與二此學脈一背馳。

〔譯〕自ら疆めて息まざるは天道なり、君子の以る所なり。虞舜の孳孳として善を爲し、大禹の日に孜孜せんことを思ひ、成湯の苟に日に新にせる、文王の遑あき暇あらざる、周公の坐して以て旦を待つ、孔子の憤りを發して食を忘るゝ如きは、皆是なり。彼の徒に靜養瞑坐を事とすのみならば、則ち此の學脈と背馳す。

五三 自彊不レ息時候、心地光光明明、有二何妄念游思一、有二何嬰累
罍想一。

〔譯〕自ら彊めて息まざる時候は、心地光光明明にして、何の妄念游思
有らん、何の嬰累罍想有らん。

〔評〕三條公の筑前に在る、或る人其の旅況の無聊を察して美女を進む、
公之を卻く。某氏宴を開いて女樂を設く、公怫然として去れり。

五四 提二一燈一、行二暗夜一。勿レ憂二暗夜一、只頼二一燈一。

〔譯〕一燈を提げて、暗夜を行く。暗夜を憂ふる勿れ、只だ一燈を頼め。

〔評〕伏水戦を開き、砲聲大内に聞え、愈激しく愈近づく。岩倉公南洲
に問うて曰ふ、勝敗何如と。南洲答へて曰ふ、西郷隆盛在り、憂ふる勿
れと。

五五 倫理物理、同一理也。我學二倫理之學一、宜三近取二諸身一、即

是物理。

〔譯〕倫理りんりと物理とは同一理なり。我れ倫理の學を學ぶ、宜しく近く諸これを身に取るべし、即ち是れ物理なり。

五六 濁水亦水也。一澄則爲二清水一。客氣亦氣也。一轉則爲二正氣一。逐レ客工夫、只是克レ己、只是復レ禮。

〔譯〕濁水だくすゐも亦水なり、一澄ちようすれば則ち清水せいすゐとなる。客氣きやくきも亦氣なり、一轉てんすれば則ち正氣せいきとなる。客きやくを逐おふの工夫は、只是れ己に克つなり、只是れ禮かへに復かへるなり。

〔評〕南洲壯時さうじかくてい角觥かくていを好み、毎つねに壯士と角す。人之くるを苦しむ。其守しゆていり庭吏と爲るや、庭中ていに土豚どとんを設まうけて、掃除さうぢよを事こととせず。既すでにして慨然がいぜんとして天下を以て自ら任にんじ、節せつを屈くつして書を読み、遂すなはち復古ふくこの大業げふを成せり。

五七 理本無レ形。無レ形則無レ名矣。形而後有レ名。既有レ名、則理

謂二之氣一、無二不可一。故專指二本體一、則形後亦謂二之理一。專指二運用一、則形前亦謂二之氣一、竝無二不可一。如二浩然之氣一、專指二運用一、其實太極之呼吸、只是一誠。謂二之氣原一、即是理。

〔譯〕理は本と形無し。形無ければ則ち名無し。形ありて後に名有り。既に名有れば、則ち理之を氣と謂ふも、不可無し。故に専ら本體を指せば、則ち形後も亦之を理と謂ふ。専ら運用を指せば、則ち形前も亦之を氣と謂ふ、竝に不可無し。浩然の氣の如きは、専ら運用を指すも、其の實太極の呼吸にして、只是れ一誠なり。之を氣原と謂ふ、即ち是れ理なり。

五八 物我一體、即是仁。我執二公情一以行二公事一、天下無レ不レ服。治亂之機、在二於公不公一。周子曰、公二於己一者、公二於人一。伊川又以二公理一、釋二仁字一。餘姚亦更二博愛一爲二公愛一。可二并攷一。

〔譯〕物我一體は即ち是れ仁なり。我れ公情を執つて以て公事を行ふ、

天下服せざる無し。治亂ちらんの機きは公と不公とに在り。周子しゅう曰ふ、己おのれに公なる者は人に公なりと。伊川いせん又公理こうりを以て仁の字しやくを釋す。餘姚よえうも亦博愛あはたを更めて公愛と爲せり。并あはせ攷かんがふ可し。

〔評〕余嘗て木戸公の言を記せり。曰ふ、會津藩士あひづはんしは、性直にして用ふ可し、長人ちやうじんの及ぶ所に非ざるなりと。夫れ會くわいは長ちやうの敵てきなり、而しかも其の言かく此の如し。以て公の事を處しよすること皆公平こうへいなるを知るべし。

五九 尊二徳性一、是以道二問學一、即是尊二徳性一。先立二其大者一、則其知也眞。能迪二其知一、則其功也實。畢竟一條路往來耳。

〔譯〕徳性を尊ぶ、是を以て問學ぶんがくに道よる、即ち是れ徳性を尊ぶなり。先づ其の大なる者を立つれば、則ち其知や眞しんなり。能く其の知を迪ふめば、則ち其功や實じつなり。畢竟一條路ひつきやういちどうろの往來のみ。

六〇 周子主レ靜、謂三心守二本體一。櫟説自二註無レ欲故靜一、程伯

氏因レ此有二天理人欲之説一。叔子持レ敬工夫亦在レ此。朱陸以下雖三各有二得レ力處一、而畢竟不レ出二此範圍一。不レ意至二明儒一、朱陸分レ黨如二敵讐一。何以然邪。今之學者、宜下以二平心一待上レ之。取二其得レ力處一可也。

〔譯〕周子靜を主とす、心本體を守るを謂ふなり。櫟説に、「欲無し故に靜」と自註す、程伯氏此に因つて天理人欲の説有り。叔子敬を持する工夫も亦此に在り。朱陸以下各力を得る處有りと雖、而かも畢竟此の範圍を出でず。意はざりき明儒に至つて、朱陸黨を分つこと敵讐の如くあらんとは。何を以て然るや。今の學ぶ者、宜しく平心を以て之を待つべし。其の力を得る處を取らば可なり。

六一 象山、宇宙内事、皆己分内事、此謂二男子擔當之志如一レ此。陳澹引レ此註二射義一、極是。

〔譯〕象山の、宇宙内の事は皆己れ分内の事は、此れ男子擔當の志此の

如きを謂ふなり。陳澔此を引いて射義を註す、極めて是なり。

〔評〕南洲嘗て東湖に従うて學ぶ。當時書する所、今猶民間に存す。曰

ふ、「一寸の英心萬夫に敵す」と。蓋し復古の業を以て擔當することを

爲す。維新征東の功實に此に讖す。末路再び讖を成せるは、悲しむべき

かな。

六二 講ニ論語一、是慈父教レ子意思。講ニ孟子一、是伯兄誨レ季意思。

講ニ大學一、如ニ網在レ綱。講ニ中庸一、如ニ雲出レ岫。

〔譯〕論語を講ず、是れ慈父の子を教ふる意思。孟子を講ず、是れ伯兄

の季を誨ふる意思。大學を講ず、網の綱に在る如し。中庸を講ず、雲の

岫を出づる如し。

六三 易是性字註脚。詩是情字註脚。書是心字註脚。

〔譯〕易は是れ性の字の註脚なり。詩は是れ情の字の註脚なり。書は是

れ心の字の註脚なり。

六四 獨得之見似レ私、人驚ニ其驟至一。平凡之議似レ公、世安ニ其狃聞一。凡聽二人言一、宜ニ虚懷而邀一レ之。勿レ苟ニ安狃聞一可也。

〔譯〕 獨得の見は私に似る、人其の驟至に驚く。平凡の議は公に似る、世其の狃聞に安んず。凡そ人の言を聴くは、宜しく虚懷にして之を邀ふべし。狃聞に苟安することなくんば可なり。

六五 心理是豎工夫、博覽是横工夫。豎工夫、則深入自得。横工夫、則淺易汎濫。

〔譯〕 心理は是れ豎の工夫なり、博覽は是れ横の工夫なり。豎の工夫は、則ち深入自得せよ。横の工夫は、則ち淺易汎濫なれ。

六六 讀レ經、宜下以ニ我之心一讀ニ經之心一、以ニ經之心一釋中我之

心上。不レ然徒爾講二明訓詰一而已、便是終身不二曾讀一。

〔譯〕經けいを讀よむは、宜しく我れの心を以て經の心を讀み、經の心を以て我の心を釋しやくすべし。然らずして徒爾とじに訓詰くんこを講明かうめいするのみならば、便すなはち是れ終身曾かつて讀まざるなり。

六七 引レ滿中レ度、發無二空箭一。人事宜二如レ射然一。

〔譯〕滿まんを引ひき度どに中あたり、發して空箭くうせん無し。人事宜しく射しやの如く然るべし。

六八 前人、謂二英氣害一レ事。余則謂、英氣不レ可レ無、但露二圭角一爲二不可一。

〔譯〕前人は、英氣えいきは事を害がいすと謂へり。余は則ち謂ふ、英氣は無かる可らず、但ただ圭角けいかくを露あらはすを不可と爲すと。

六九 刀槩之技、懷二怯心一者衄、頼二勇氣一者敗。必也泯二勇怯於一靜一、忘二勝負於一動一。動レ之以レ天、廓然太公、靜レ之以レ地、物來順應。如レ是者勝矣。心學亦不レ外二於此一。

〔譯〕刀槩の技、怯心を懷く者は衄け、勇氣を頼む者は敗る。必や勇怯を一靜に泯し、勝負を一動に忘れ、之を動かすに天を以てして、廓然太公に、之を靜むるに地を以てして、物來つて順應せん。是の如き者は勝たん。心學も亦此に外ならず。

〔評〕長兵京師に敗る。木戸公は岡部氏に寄つて禍を免るゝことを得たり。後丹波に赴き、姓名を變へ、博徒に混り、酒客に交り、以て時勢を窺へり。南洲は浪華の某樓に寓す。幕吏搜索して樓下に至る。南洲乃ち劇を観るに託して、舟を僦りて逃げ去れり。此れ皆勇怯を泯し勝負を忘るゝものなり。

七〇 無レ我則不レ獲二其身一、即是義。無レ物則不レ見二其人一、即

是勇。

〔譯〕我れ無ければ則ち其身を獲ず、即ち是れ義なり。物無ければ則ち其人を見ず、即ち是れ勇なり。

七一 自反而縮者、無レ我也。雖二千萬人一吾往矣、無レ物也。

〔譯〕自ら反みて縮きは、我無きなり。千萬人と雖吾れ往かんは、物無きなり。

七二 三軍不レ和、難ニ以言一レ戰。百官不レ和、難ニ以言一レ治。書云、同レ寅協レ恭和衷哉。唯一和字、一二串治亂一。

〔譯〕三軍和せずば、以て戰を言ひ難し。百官和せずば、以て治を言ひ難し。書に云ふ、寅を同じうし恭を協せ和衷せよやと。唯だ一の和字、治亂を一串す。

〔評〕復古の業は薩長の合縦に成る。是れより先き、土人坂本龍馬、薩

長の和せざるを憂へ、薩邸に抵り、大久保・西郷諸氏に説き、又長邸に抵り、木戸・大村諸氏に説く。薩人黒田・大山諸氏長に至り、長人木戸・品川諸氏薩に往き、而て後和成り、維新の鴻業を致せり。

七三 凡事有二眞是非一、有二假是非一。假是非、謂三通俗之所二可否一。年少未レ學、而先了二假是非一、迨レ後欲レ得二眞是非一、亦不レ易レ入。所レ謂先入爲レ主、不レ可二如何一耳。

〔譯〕凡そ事に眞是非有り、假是非有り。假是非とは、通俗の可否する所を謂ふ。年少未だ學ばずして、先づ假是非を了し、後に迨んで眞是非を得んと欲するも、亦入り易からず。謂はゆる先入主と爲り、如何ともす可らざるのみ。

七四 果斷、有二自レ義來者一。有二自レ智來者一。有二自レ勇來者一。有下并二義與一レ智而來者上、上也。徒勇而已者殆矣。

〔譯〕 果斷くわだんは、義ぎより來るもの有り。智ちより來るもの有り。勇ゆうより來るもの有り。義と智とを併あはせて來るもの有り、上じやうなり。徒たゞに勇ゆうのみなるは殆あやふし。

〔評〕 關八州くわんはつしうは古より武を用ふるの地と稱す。興世王おきよはんぎやく反逆すと雖、猶まさかど將門まさかどに説いて之に據よらしむ。小田原おだわらの役えき、豊公ほうは徳川公とくがわこうに謂いうて曰ふ、東方とうほうに地あり、江戸えどと曰ふ、以て都府とふを開く可しと。一新いっしんの始はじめ、大久保公おおくぼこう遷都せんとの議ぎを獻けんじて曰ふ、官軍くわんぐん已に勝かつと雖、東賊とうぞく猶未だ滅ほろびず、宜ひじやうしく非常ひじやうの斷だんを以て非常の事を行ふべしと。先見せんけんの明智めいぢと謂いふ可し。

七五 公私在レ事、又在レ情。事公而情私者有レ之。事私而情公者有レ之。爲レ政者、宜下權ニ衡人情事理輕重處一、以用中其中於上レ民。

〔譯〕 公私こうしは事に在り、又情に在り。事公にして情私なるもの之有り。事私にして情公なるもの之有り。政を爲す者は、宜しく人情事理じりけいじり輕重の處けんかうを權衡して、以て其の中ちゆうを民に用ふべし。

〔評〕南洲城山に據る。官軍柵を植ゑて之を守る。山縣中將書を南洲に寄せて兩軍殺傷の慘を極言す。南洲其の書を見て曰ふ、我れ山縣に負かずと、斷然死に就けり。中將は南洲の元を視て曰ふ、惜しいかな、天下の一勇將を失へりと、流涕すること之を久しうせり。噫公私情盡せり。

七六 慎獨工夫、當下如三身在二稠人廣座中一般上。應酬工夫、當下如二間居獨處時一般上。

〔譯〕慎獨の工夫は、當に身稠人廣座の中に在るが如く一般なるべし。應酬の工夫は、當に間居獨處の時の如く一般なるべし。

七七 心要二現在一。事未レ來、不レ可レ邀。事已往、不レ可レ追。纔追纔邀、便是放心。

〔譯〕心は現在せんことを要す。事未だ來らずば、邀ふ可らず。事已に往かば、追ふ可らず。纔かに追ひ纔かに邀へば、便ち是れ放心なり。

七八 物集ニ於其所一レ好、人也。事赴ニ於所一レ不レ期、天也。

〔譯〕 物^{もの}其の好む所^{あつま}に集るは、人なり。事^{こと}期せざる所^{おもむ}に赴くは、天なり。

七九 人貴ニ厚重一、不レ貴ニ遲重一。尚ニ眞率一、不レ尚ニ輕率一。

〔譯〕 人は、厚^{こうちゆう}重を貴ぶ、遲^{ちちゆう}重を貴ばず。眞^{しんそつ}率を尚^{たつと}ぶ、輕^{けいそつ}率を尚ばず。

〔評〕 南洲人に接して、妄^{みだり}に語^ごを交へず、人之を憚^{はぶか}る。然れども其の人を知るに及んでは、則ち心を傾^{かたむ}けて之を援^{たす}く。其人に非ざれば則ち終身^{しゅうしん}言^いはず。

八〇 凡生物皆資ニ於養一。天生而地養レ之。人則地之氣精英。吾欲三
靜坐以養レ氣、動行以養レ體、氣體相資、以養ニ此生一。所ニ以從レ地
而事一レ天。

〔譯〕 凡そ生物は皆^{やう}養を資^とる。天生じて地之を養^{やしな}ふ。人は則ち地の氣の

精せい英えいなり。吾れ靜坐して以て氣を養ひ、動行どうかうして以て體を養ひ、氣と體と相資とつて以て此の生を養はんと欲す。地に從うて天に事ふる所以なり。「評」維新の業げふは三藩の兵力に由ると雖、抑之を養ふに素そあり、曰く名義めいぎなり、曰く名分めいぶんなり。或は云ふ、維新の功こうは大日本史及び外史に基もとづく、亦理無りなしとせざるなり。

八一 凡爲レ學之初、必立下欲レ爲ニ大人一之志上、然後書可レ讀也。不レ然、徒貪ニ聞見一而已、則或恐ニ長レ傲飾一レ非。所レ謂假ニ寇兵一、資ニ盜糧一也、可レ虞。

〔譯〕凡そ學を爲すの初め、必ず大人たらんと欲するの志を立て、然る後書讀む可し。然らずして、徒いたづらに聞見を貪むさぼるのみならば、則ち或は傲がうを長ちやうじ非かぎを飾らんことを恐る。謂はゆる寇こうに兵を假かし、盜たうに糧りやうを資しするなり、虞おもんばかる可し。

八二 以二眞己一克二假己一、天理也。以二身我一害二心我一、人欲也。
〔譯〕 眞己しんこを以て假己かこに克つ、天理なり。身我しんがを以て心我がいを害す、人欲じんよくなり。

八三 無二一息間斷一、無二一刻急忙一。即是天地氣象。

〔譯〕 一息そくの間斷かんだん無く、一刻こくの急忙きふばう無し。即ち是れ天地の氣象きしやうなり。

〔評〕 木戸公每旦考妣ちんぱの木主を拜す。身煩劇はんげきに居ると雖、少しくも怠おたらず。三十年の間一日の如し。

八四 有レ心ニ於無一レ心、工夫是也。無レ心ニ於有一レ心、本體是也。
〔譯〕 心無きに心有るは、工夫くふう是なり。心有るに心無きは、本體ほんたい是なり。

八五 不レ知而知者、道心也。知而不レ知者、人心也。

〔譯〕 知らずして知る者は、道心だうしんなり。知つて知らざる者は、人心じんしんなり。

八六 心靜、方能知二白日一。眼明、始會レ識二青天一。此程伯氏之句也。青天白日、常在二於我一。宜下掲二之座右一、以爲中警戒上。

〔譯〕心靜にして、方に能く白日を知る。眼明かにして、始めて青天を識り會すと。此れ程伯氏の句なり。青天白日は、常に我に在り。宜しく之を座右に掲げて、以て警戒と爲すべし。

八七 靈光充レ體時、細大事物、無二遺落一、無二遲疑一。

〔譯〕靈光體に充つる時、細大の事物、遺落無く、遲疑無し。

〔評〕死を決するは、薩の長ずる所なり。公義を説くは、土の俗なり。

維新の初め、一公卿あり、南洲の所に往いて復古の事を説く。南洲曰ふ、夫れ復古は易事に非ず、且つ九重阻絶し、妄に藩人を通ずるを得ず、必ずや縉紳死を致す有らば、則ち事或は成らんと。又後藤象次郎に往いて之を説く。象次郎曰ふ、復古は難きに非ず、然れども門地を廢し、門閥

を罷め、賢を擧ぐるこゝ方なきに非ざれば、則ち不可なりと。二人の本領自ら見はる。

八八 人心之靈、如二太陽一然。但克伐怨欲、雲霧四塞、此靈鳥在。故誠レ意工夫、莫レ先下於掃二雲霧一仰中白日上。凡爲レ學之要、自レ此而起レ基。故曰、誠者物之終始。

〔譯〕 人心の靈、太陽の如く然り。但だ克伐怨欲、雲霧四塞せば、此の靈鳥くに在る。故に意を誠にする工夫は、雲霧を掃うて白日を仰ぐより先きなるは莫し。凡そ學を爲すの要は、此よりして基を起す。故に曰ふ、誠は物の終始と。

八九 胸次清快、則人事百艱亦不レ阻。

〔譯〕 胸次清快なれば、則ち人事百艱亦阻せず。

九〇 人心之靈、主二於氣一。氣體之充也。凡爲レ事、以レ氣爲二先導一、則舉體無二失措一。技能工藝、亦皆如レ此。

〔譯〕 人心の靈は、氣を主とす。氣は體に之れ充つるものなり。凡そ事を爲すに、氣を以て先導と爲さば、則ち舉體失措無し。技能工藝も、亦皆此の如し。

九一 靈光無二障碍一、則氣乃流動不レ餒、四體覺レ輕。

〔譯〕 靈光障碍無くば、則ち氣乃ち流動して餒えず、四體輕きを覺えん。

九二 英氣是天地精英之氣。聖人蒞二之於内一、不三肯露二諸外一。賢者則時時露レ之。自餘豪傑之士、全然露レ之。若下夫絶無二此氣一者上、爲二鄙夫小人一、碌碌不レ足レ算者爾。

〔譯〕 英氣は是れ天地精英の氣なり。聖人は之を内に蒞めて、肯て諸を外に露はさず。賢者は則ち時時之を露はす。自餘豪傑の士は、全然之を

露^{あら}はす。夫^かの絶^たえて此^{この}氣^きなき者の若^{わか}きは、鄙^ひ夫^ふ小人^{じん}と爲^なす、碌^{ろく}碌^{ろく}として算^{かぞ}ふるに足^たらざるもののみ。

九三 人須^たレ著^つ二忙^{ばう}裏^り占^{かん}レ間^{かん}、苦^く中^{ちゆう}存^{ぞん}レ樂^{らく}工夫^{くわふ}一。

〔譯〕 人は須^たらく忙^{ばう}裏^りに間^{かん}を占^{かん}め、苦^く中^{ちゆう}に樂^{らく}を存^{ぞん}ずる工夫^{くわふ}を著^つくべし。

〔評〕 南洲岩崎谷洞中に居る。砲丸雨の如く、洞口を出づる能はず。詩あり云ふ「百戰無^くレ功^{こう}半^{はん}歳^{さい}間^{かん}、首^{しゆ}邱^{きゆう}幸^{こう}得^{とく}レ返^{へん}二家^か山^{さん}一。笑^{せう}儂^{じゆう}向^{かう}レ死^し如^{ごと}二仙^{せん}客^{かく}一。盡^{じん}日^{じつ}洞^{どう}中^{ちゆう}棋^き響^{きやう}間^{かん}」(編者曰、此詩、長州ノ人杉孫七郎ノ作ナリ、南洲翁ノ作ト稱スルハ誤ル) 謂^いはゆる忙^{ばう}中^{ちゆう}に間^{かん}を占^{かん}むる者^{もの}なり。然^{しか}れども亦^{また}以^もて其^{その}の戰^{せん}志^し無^くきを知^しるべし。余^あ句^くあり、云^いふ「可^かレ見^み南洲無^く二戰^{せん}志^し一。砲丸雨裡間牽^{けん}レ犬^{いぬ}」と、是^これ實^{じつ}録^{ろく}なり。

九四 凡^{たゞ}區^く二處^こ人事^{じんじ}一、當^た下^げ先^ま慮^り二其^{その}結^{けつ}局^{りやく}處^こ一、而^{しか}後^{のち}下^げ上^のレ手^て。無^くレ楫^{しやく}之^の舟^{ふね}勿^たレ行^ゆ、無^くレ的^{てき}的^{てき}之^の箭^や勿^たレ發^{はつ}。

〔譯〕 凡そ人事を區處くしよするには、當さに先づ其の結局けつぎよくの處を慮おもんばかりて、後に手を下すべし。楫かぢ無きの舟は行やる勿なかれ、的まと無きの箭やは發はなつ勿なかれ。

九五 朝而不レ食、則晝而饑。少而不レ學、則壯而惑。饑者猶可レ忍、惑者不レ可二奈何一。

〔譯〕 朝あさにして食くらはずば、晝ひるにして饑うう。少わかうして學まばずば、壯たくまにして饑ううるは猶しよ忍しのぶ可べし、惑まどふは奈何ともす可べからず。

九六 今日之貧賤不レ能二素行一、乃他日之富貴、必驕泰。今日之富貴不レ能二素行一、乃他日之患難、必狼狽。

〔譯〕 今日こんにちの貧賤ひんせんに素行そかうする能あたはずば、乃ち他日たいつの富貴ふうきに、必かならず驕泰けうたいならん。今日こんにちの富貴ふうきに素行そかうする能あたはずんば、乃ち他日たいつの患難くわんなんに、必かならず狼狽らうばいせん。

〔評〕南洲、顯職けんしよくに居り勳功くんこうを負ふおと雖、身極めて質素しつそなり。朝廷賜たまふ所の賞典しやうてん二千石は、悉ことごとくく私學校の費ひに充あつ。貧困ひんこんなる者あれば、囊のうを傾かたむけて之を賑すくふ。其の自ら視ること欲然かんぜんとして、微賤びせんの時の如し。

九七 雅事多是虚、勿下謂二之雅一而耽上レ之。俗事却是實、勿下謂二之俗一而忽上レ之。

〔譯〕雅事がじ多くは是れ虚きよなり、之を雅がと謂うて之に耽ふけること勿れ。俗事却て是れ實なり、之を俗と謂うて之を忽ゆるがせにすること勿れ。

九八 歴代帝王、除二唐虞一外、無二眞禪讓一。商周已下、秦漢至二於今一、凡二十二史、皆以レ武開レ國、以レ文治レ之。因知、武猶レ質、文則其毛彩、虎豹犬羊之所二以分一也。今之文士、其可レ忘二武事一乎。〔譯〕歴代れきだいの帝王、唐虞たうぐを除く外、眞ぜんの禪讓じやうなし。商周しやうしう已下秦漢かしかんより今に至るまで、凡そ二十二史、皆武を以て國を開き、文を以て之を治む。

因つて知る、武は猶質のごとく、文は則ち其の毛彩にして、虎豹犬羊の分るゝ所以なるを。今の文士、其れ武事を忘る可けんや。

九九 遠方試レ歩者、往往舍ニ正路一、趨ニ捷徑一、或繆入ニ林莽一、可レ嗤也。人事多類レ此。特記レ之。

〔譯〕遠方に歩を試むる者、往往にして正路を捨て、捷徑に趨り、或は繆あまつて林莽りんまうに入る、嗤わらふ可きなり。人事多く此に類す。特に之を記す。

一〇〇 智仁勇、人皆謂ニ大徳難一レ企。然凡爲ニ邑宰一者、固爲ニ親民之職一。其察ニ奸慝一、矜ニ孤寡一、折ニ強梗一、即是三徳實事。宜下能就ニ實迹一以試レ之可上也。

〔譯〕智仁勇は、人皆大徳企て難しと謂ふ。然れども凡そ邑宰たる者は、固と親民の職たり。其の奸慝を察し、孤寡を矜み、強梗を折くは、即ち是れ三徳の實事なり。宜しく能く實迹に就いて以て之を試みて可なるべ

し。

一〇一 身有二老少一、而心無二老少一。氣有二老少一、而理無二老少一。須丙能執下無二老少一之心上、以體乙無二老少一之理甲。

〔譯〕 身に老少有りて、心に老少無し。氣に老少有りて、理に老少無し。須らく能く老少無きの心を執つて、以て老少無きの理を體すべし。

〔評〕 幕府南洲に禍せんわざはひと欲す。藩侯之を患へうれ、南洲を大島に竄すおほしま ざん。

南洲貶竄せらるゝこと前後數年なり、而て身益壯さかんに、氣益旺さかんに、讀書是より大に進むと云ふ。

底本… 「西郷南洲遺訓」 岩波文庫、岩波書店

1939 (昭和14) 年2月2日第1刷発行

1985 (昭和60) 年2月20日第26刷発行

底本の親本… 「南洲手抄言志録」 博聞社

1888 (明治21) 年5月17日発行

初出… 「南洲手抄言志録」 博聞社

1888 (明治21) 年5月17日発行

※ 「「褒」の「保」に代えて「丑」「は」「デザイン差」と見て「衰」で入力しました。

※底本の末尾に添えられた「書後の辭」で、秋月種樹氏が漢文の評言を附したとある。

入力… 田中哲郎

校正… 川山隆

2008年7月14日作成

2009年9月1日修正

青空文庫作成ファイル..

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。